



筑紫女学園大学リポジト

台湾現代文学《土地と靈魂》の創作意識について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石, 其琳, SEKI, Kilin メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/32

台湾現代文学《土地と靈魂》の創作意識について

石 其 琳

Weiting Stance of Wang You Hua's "Soil and Soul"

Kirin SEKI

はじめに

本論は前回発表した論文(注1)の関連内容である。台湾現代文学の長編歴史小説《土地と靈魂》は、作家王幼華の台湾の中山文学賞受賞作であり、前回はこの作家の人生及び創作観について取りあげたのである。現在私は研究対象であるこの作品の翻訳作業を進めているが、今回はこの作品を中心に、その創作の動機、内容に関する歴史的資料の収集および作者自ら説明する創作の過程などを取りあげながら説明を加え、さらにこの作品の連載発表、出版に至る経緯も付け加える。作品の創作、出版に関わるさまざまな背景と要素を明らかにすることで、作品に対してより多視角的な認識と理解が深められると考える。

一 作品における時代的重要性と位置づけ

以下この作品の創作動機と契機説明のため、二つの資料を用いる。一つは、この作品が中山文学賞を受賞して間もない1992年桃園文化局において、《土地と靈魂》に関する討論会が行われたその資料である。(注2) もう一つは2007年王幼華個人に対するインタビュー資料である(注3)。この二つの資料には、王幼華自らの創作に関する目的意識、物語の歴史事実および小説人物の構成に対する思いなどが明らかにされている。そして台湾の社会情勢、特に政治的支配状況が大きく変動する時期にあたり、作者は極めて深刻な問題が多数に露呈されたと考え、この作品をもって、現実社会の風潮、思考に対し、再確認の必要性和同時に、進化を期待したのである。

さて、一つ目の資料の討論会は、桃園文化センターにおける「当代文学討論会」の一環として行われたものである。この討論会の主評担当者は作家の林耀徳氏である。そして彼は討論会のはじめにおいて、作品《土地と靈魂》の時代的価値と位置づけに対し、批評を加え解析している。以下はその点に関わる内容を摘録しながら説明を加える。

この作品の時代的に重要な価値について、80年代中期から90年代の短期間において、台湾の作家たちは、台湾本土の歴史と政治の発展に対して高い興味を示し、台湾歴史に関する文学創作が目立つように多数産出されている。作家東方白の《浪淘沙》(注4)の作品は一例であるし、王氏の《土地と靈魂》もそうであると林氏は台湾現代文学史上におけるこの作品の位置づけを明確に示している。

王幼華は長い創作経歴の持ち主であり、その創作の基礎、小説の格調および創作の探索テーマはすでに定着しているが、そのすべてがこの小説に投入反映され、作品の特徴的な背景と構成に生かされている。実際19世紀後半の台湾では、小説に描かれた事件が特別なでき事ではなく、当時において、ごく普通に発生しうる事件である。その時代は、英国の東インド会社があり、台湾の各種経済制度、大陸から各省籍、例えば、泉州、漳州、客家など華人間の複雑な関係だけではなく、西洋人と台湾人間の貿易往来も含め、すべてが歴史的事実であると林氏は強調する。さらに歴史小説創作の重点について、歴史をそのまま重述するものではなく、重要なのは歴史事実を通してその背景を成立させながら、そこに作家自身の歴史に対する解釈と観点を取り込まなければならないということであり、またその解釈をもって、読者との対話関係を築くのである。林氏はこの視点から本作品の価値と位置づけに対し、「台湾の歴史に詳しくない人なら、この作品を通じて、台湾の歴史に興味を持ち始める入門的作品になるが、すでに台湾の歴史に詳しい人であれば、この作品を通じて、作者と台湾の文化、民族、早期生活経験についての対話ができる。」と指摘している。

80年代末期より、台湾社会全体が蔣氏親子政権の終結とともに多元化形態に変わり、作家たちもこの多元化理念の下で創作をしなければならなかった。林氏によれば、この作品の最大の特徴とは、主役の一人である陳大化を除いて、すべての重要人物が漢民族ではないことである。小説の主役たちは外国人と原住民であり、その内容と分量、または精神的品質においてみれば、この舞台である台湾情勢は、一般的印象である漢民族支配で、漳、泉、客家が分配されることではなく、逆に小説では誰が台湾の主人であろうか、誰が本当に土地所有をできるだろうかという疑問を台湾社会へ投げかけたのである。

台湾史の論述について。従来の観点では、400年間漢民族による圧迫された開拓史であるとの認識が一般的である。しかしそもそも台湾社会は継続的移民の歴史の成り行きであり、漢民族中心の観点に対し、疑問視すべきであろうと作者によりこの小説で問題提起をされたのである。

二 作品創作の動機について

以下は王幼華がこの作品の創作動機またはきっかけについて語っている内容を取りあげる。

創作のきっかけについて、彼は早くから台湾問題、台湾の歴史に興味を持ち、常に関連著作と史料を収集しながら研究に従事している。さらに自己の生まれ育った土地に対し、自らの観念、思想を建立し、解釈する努力をしたと語っている。この作品《土地と靈魂》の創作動機について、デビットソン氏の著作《台湾島の過去と現在》(James W. Davidson, *The Island of Formosa, Past and Present* 1903) (頼永祥訳)を読み、書中の「大南澳侵墾事件」を読んで創作する動機を啓発されたという。そして彼はこの創作の動機を引き起こされる重要な理由背景についても述べている。日本植民地時代の期間中、日本の学者は台湾において多くの史料、例えば生番、熟番について、かなり詳細な調査を行っている。ゆえに現在の考古学者、歴史学者らもまだその資料を使用している。しかしずっとこれら資料の範囲での考察にとどまるのは不足であろうと考え、西洋の資料も見てみたいと考えた時、頼訳本と出会い強い刺激を受けつつまた面白く感じたという。《台湾通史》にも同じ

ような内容に関する記載があったので、台湾の問題に新たな視角でとらえられないかと、常に政府
官方資料または日本資料の枠にとどまらず、新しい視野の天窓を開くべきだと考えたのである。当
時友人の劉克襄氏がずっとこのような研究をしており、多くの探検家、西洋地理学者に関する著作
を出している。王氏はこれらの書籍を読み、これまでの自分の台湾に対する興味に衝撃を受け、心
に激動を覚えたところで、この小説を書き始めたという。当時数的にも少ないこれらの著作は、彼
の台湾の歴史に対して新たな視点を啓発し、一般社会の認識とは相違する構想をもたらした重要な
鍵だったといえる。そしてこの発想を導いたもう一つ重要な要素は、彼自身が外省人出身だったこ
とである。この点に関して次のように語っている。

自分は外省人の第二世代生まれである。両親ともに外省籍で、彼の本籍は山東省であるが、高校
を卒業するまで、自分は「外省人」であり、台湾の土地とは無関係だと考えていた。なぜなら両親
からは常日頃将来は故郷に帰るんだと聞かされていたからである。しかし大学入学後に数人の教師
から影響を受け、当時はまさに「郷土文学運動」の風潮が高揚している時期であり、その関連雑誌
を読むことで、自らがいったい外省人なのか、それとも台湾人なのかと大きく反省する機会を与え
られ、この問題にずっと困惑されたという。

80年代の台湾は政治的に内外部ともに大きな変化を伴う時代であった。政策と国際的地位の問題
などさまざまな要素が混雑して、台湾人意識が強まり、また「台湾人」という解釈も「本省人」と
いわれる「閩南人」（福建省南部出身）を中心とした、強い排他性、闘争性を持った言論が充満し
た情勢である。当然この思考意識はその他の住民「客家人」、または作者のような「外省人」たち
に不安と焦慮を与えたのである。作者王氏はこの問題を抱えながら思考を持続させ、この作品を書
く動機には、このような不安と焦慮に起因するところが決して少なくはないという。

この点に関して、前述したもう一つのインタビュー資料を取りあげる。この資料は2007年に行っ
たもので、当時台湾の政界は、2000年以来民進党が長年の国民党統治にとってかわり政権を奪取し
た時期であった。しかし民進党の支配には多くの偏狭性が生じ、汚職を含めてさまざまな問題が発
生している。彼はこのインタビューで、作品《土地と靈魂》の創作源について、次のように述べて
いる。

国民党の統治から近い将来には政治的大きな変化が必ず到来するだろうと早い時期から予測して
いた。国民党支配も長くなればなるほど本土化（現地化）せざるを得ない。よって社会風潮に本土
論の声が高くなり、政権交代の可能性が高い。事実上、数的には本省人が絶対的優位にあり、こ
のような成り行きもごく普通に想定できることであろう。しかし当時は台湾住民の本省人を中心と
した「福佬沙文主義」が現れ、すべての外省人に極悪のレッテルを貼り、客家人は無視され、原住民
も落後の民族とみなされ、「福佬」だけが台湾の中心的存在だという論理をかかげて、政権をとる
正当性を示唆するのである。このような「福佬沙文主義」的論述には強い排他性を含むので、外省
人のすべてに原罪意識を被せること自体不公平であり、間違いである。さらに「台湾語」といえば
「閩南語」であるべきだということもおかしいのだと王氏は強調する。当時の政権が考える「台湾人」
の意味には客家人も、原住民も含まれないし、差別の対象になっている。しかし実際に清代の歴史
を檢視すれば、いわゆる開拓民である閩、粵移民は原住民に対して残酷極まる行為の歴史的事実が

多数残されている。実際に原住民を殺し、土地を奪いながら、彼らを差別しているのである。今自分たちが「台湾人」を正当化すれば、原住民たちの地位はどこにあるのだろうか？本来数十万人いるべき原住民はもう殺されて数万人しか残っていないという。この現実こそ「原罪」ではないだろうかと王氏は指摘する。《土地と靈魂》を書いたとき、特にこのような「福佬沙文主義」の提唱者たちに対し、台湾を論述する際、包容性が絶対に必要だと気付かせたいと彼は考えたのである。さらに彼はこの包容性の重要性について、次のように語った。台湾独立運動はいまに始まったことではなく、清一代でも「朱一貴の乱」(1721年)、「林爽文の乱」(1786年)、「戴潮春の乱」(1862年)、「唐景崧の独立運動」(1895年)などすでに引き起こされたことがあるが、全部失敗に終わったのである。その失敗の理由は、彼らは住民全体が受け入れられる包容性のある台湾独立理論を提供できなかったからだ。実際林爽文事件に関して見れば、もとは当時の閩、粵移民が団結して清王朝と対抗する独立戦争だったが、結局閩、粵移民の闘争に変わり、相互の殺し合いになったのである。現在の状況を考えると、外省人、客家人、原住民の支持を得れば、良い方向へ行くはずだが、残念なことに、現実社会では憎しみと排他的意識だけが甚だしく強調されたのである。ここで王氏は創作意図に、もう一つの理由として再度強調したのは、作品《土地と靈魂》の出発点は台湾歴史の深層へ切り込みたいと考えたのである。

上述した内容を理解するには、もう一つ重要な研究資料に触れなければならない。王氏のこれまでの発言では「福佬沙文主義」に対して数度反発しているが、実は研究者としての彼が清代の移民に関する歴史資料を研究し論文を発表している。その論文のタイトルは《清代台湾の原住民と漢族の衝突》(注5)である。

(1) 清代台湾原住民と漢人衝突の実態について

上述した論文の前言に、清代康熙22年(1683年)、政府は東南海上の対抗勢力を撃退し、鄭成功三代の経営を瓦解させたと同時に、台湾は清王朝の版図に確保されたのである。その後、この島に対する統治、管理について、多くの文献資料を研究し調べたが、それは実に並大抵ではない困難極める過程であった。本来台湾はどこかの強権からも支配されていなく、二、三十の原住民族群も大半が漁業と狩猟社会であるという生活状況をみれば、かなり原始的である。そして清朝支配が正式に始まった頃、島に渡ることは禁令であったにもかかわらず、移民たちは絶えずに移住している。数十年のうちに、移民の数が原住民を上まわったのである。当然これら中国大陆から来た移民たちは原住民との間に自然的に「適応」と「調整」の状況が発生し、現実的には衝突することも避けられないのだと述べている。

論文の第一節では、漢民族移民が台湾に入ることにより発生した、衝突の展開、武力での鎮圧について、文献資料を使用しながら説明している。

まず衝突の展開について、「衝突」は文化、経済、社会、武力などの層面を含む。これら衝突の結果が「取代」のである。要するに台湾島が全面的「中国化」され、移民による島全体の「同化」、原住民は「多民族の主流」から遷移、降服、消失する「支流」の周辺者に強いられるのである。このような事例は近代世界史において、アメリカ、カナダ、オーストラリアにも発生している。ヨー

ロッパ移民の到来によって、それぞれの土地の原住民を征服し、完全に後來者の領域になっている。台湾の場合、文化衝突といえば、原住民たちに「改風易俗」を進め、服装から生活風俗習慣の改易と消除を行い、清朝文化を馴染ませ、完全に清朝の庶民になることであった。

経済方面においては、本来原住民たちには土地経営の観念がなく、貯蓄など財富を蓄える習慣もなかったのである。当時移民たちは常に開拓団方式で島へ侵入し、宗族、郷親の集团的力に頼り、組織的、計画的に開拓するなか、原住民たちはこれら官府とかかわる開拓集団には対抗できないため、族群が委縮され、遷移、弱化或いは消失を強いられたのである。大規模な漳、泉、粵東の移民の侵入により、原来の族群構成が破壊され、婚姻関係、社群組織も崩壊されたのである。そのうえ強く抵抗する部族は真っ先に消滅され、統治側は畏服する族群を扶持し、強大化させ、「以番治番」の政策を行い、「原」、「漢」の通婚も進み、その結果母系社会を質変させ、漢民族と親戚にもなれば、移民が当然のように原住民の土地を占有できるようになるのである。社会的倫理、秩序も強勢的力をもつ漢人の入植により、崩壊、委縮し、族群の意識が渙散になり、徐々に移住者がもたらした社会規範と価値観に取代されるのである。

続いて論文は武力鎮圧についても述べている。衝突のなか、最も有力で決定的な征服方法といえば、やはり「武力」であろう。200年以上ある清代の文献によれば、数度も朝廷から原住民の反乱を討伐する記録が残されている。しかし台湾ではオランダ統治から、鄭成功支配へ、さらに清朝統治の約300年間、原住民の不評不満の声はなかったのである。歴史は強者たる移住者側が書き、解釈するため、原住民たちの数千年続く社群が消失し、土地を略奪されたのである。生存のために自分たちの身分、血統、文化を忘れなければならない、このような沈黙と空白はまさに台湾の歴史を補足し、書き直すべきところであろう。

論文の第三節「他者の記録のなか」において、王氏は当時多く実際に台湾管理の経験をもつ官吏たちの実録を取りあげ、生々しく当時の原住民と移住者の間、または支配側との衝突の実態を明らかにしている。これらの叙述は、官方記録もあれば、官吏個人の自由意識で発揮するものも多数含まれている。このように違った心態によって書かれた実録なので、原住民が征服者のもとで、侵圧され、沈淪、崩解、流亡の過程が鮮明に露呈されている。

この点に関して、以下上述の論文に取りあげた一つの作品に触れてみたい。

作品は清嘉慶20年（1815年）澎湖通判から鳳山県丞へ転任した呉性誠（湖北省黄安出身）が書いた長編叙事古詩《入山歌》である。内容は清代中期の移民が原住民の土地を侵襲する最も代表的、詳実かつ震撼させる作品であると王氏は指摘する。作品が長いので、ここでは一部分の重要な内容を摘録しながら見ていく。

この作品は漢人と原住民の土地争いで、当時では有名な郭百年侵襲事件を描写している。呉性誠はこの事件発生後彰化県知事を勤めることになり、事件のすべてに関わったため、漢人の残酷な手段を目撃し、その作品は良識ある漢人官吏より描かれたものとして、大変貴重な資料である。

当時原住民と漢人の間、政府は境界線を引いて、「土牛」（盛り土）で標示している。生番は出草の習慣があり、人殺しもするので、本来怖い存在だが、しかし利益を欲張る民衆は、冒死して武器を持って彼らと土地争いをする。原住民は勇敢だが、多人数の漢人たちが武器を持って一斉に攻撃す

ると、結局抵抗できなく泣きながら降服の憂き目をみるのである。このような状況は、当時台湾各地において、多少事件の軽重差、死傷者数、または政府に知られているかどうかの相違があるが、日常茶飯事のように起っていたのである。以下の詩の内容は、郭百年侵壘事件について詳細に描写している。

この詩句は、漢人たちが台湾の政府官員と勾結して、糧食徴収と偽って官員に扮し、赤い傘をさして出てくる。原住民たちが偽官員を接待する最中の、まったく無防備の状況下、突撃されるのである。以下はその屠殺される状況を描写している。

強くて早く逃げた人は難を逃れたが、老弱婦孺は逃げ切らないため、侵入者に捉えられ、殺されたのだ。そして彼らは原住民の倉庫を開き、糧食をすべて運びだし、牛と羊も略奪して、番人の住居を焼き払い、最悪なのは番人たちのお墓も掘り起し、死者の死骸を投げ散らかし、原住民たちは、豪泣しながら、深い山へと逃げていくのだ。

不管蚩蚩者死生。

ここでは原住民たちを追い払った後、彼らは堂々とそこに家を建てる。碉堡を築き、論功行賞が始まり、土地を分配する状況を描写している。実際このような光景は、清代において、絶えずに台湾の全島で見られるごく普通の現象であり、偶然にも呉性誠の手によって、詩作として描写されただけである。呉氏はやはり良識ある官員であるので、この光景を目にすることで大変困惑し、自己の責任を果たしていないじゃないかと深く反省している。その様子を次の詩句でよんでいる。

呉氏は原住民を異類とは見なしていないし、保護を受けるべき「赤子」だと思い、彼らが被害を受けていることで、悩み夜も眠れなく、寝台の周りを徘徊しながら苦しんだのである。

この詩はごく一部だけのもので、論文には多数の文献が取りあげられている。当時の原住民と漢人との衝突が無情であり、残酷であることがこの詩からもうかがい知れる。

論文の第三節の「新階級の形成」も重要視せねばならない。当時清王朝が征服者であり、移民たちは中国大陸での出身、貧農、犯罪者、浪人などにもかかわらず、台湾に移住する際、統治集団の一員であり、自然に統治階級に属するのである。闘争のなかの敗北者は、結局支配されることになるのである。罪を強いられ、差別され、卑賤的階級とみなされ、征服者たちに支配されるのが当然と思われたのである。実際このような構図が清代から特に強く定着され、のちに自分たちが台湾住民の中心的存在と強い認識をもち、いわゆる「福佬沙文主義」意識を現在まで潜在的に持ち続けているのであるから、それは極めて消え難いと言わねばならない。

王氏がこの論文を書きあげた以上、当然台湾の歴史の裏面に潜在する多数の残虐的痕跡は深く認識している。よって作品の「序文」(注6)にも書いているように、現代のある一部分、日本時代に成長した作家たちは、漢文の古文献を読めないために、自分たちの歴史に対して無知であり、誤釈している点を指摘している。そしてこれまで誰もが恥じさらし的に、このあたりの歴史を研究し、自分たちの残虐な過去をあきらかにすることはなかったと彼は呟くのである。《土地と靈魂》の創作動機にもった思いの深層には、真剣に台湾の問題を考え、そしてこれらの確実な歴史事実を踏まえたいうで、原住民に対して、漢人たちの深い反省材料にできることとして提示したのである。彼はインタビューでは次のように語り続けている。「《土地と靈魂》の物語は基本的に実際の事件であり、この事実は否定できない。そしてこの小説は台湾論述の反省であり、特に『福佬沙文主義』者らにとって、このような事実から反省と検討すべき好材料になるであろう。」これは上述した論文の宗旨と呼応している。

(2) 「大漢沙文主義」について

ここでもう一つ「大漢沙文主義」(漢民族中心主義)について触れてみたい。王氏が特にこの点について討論会で述べているし、実際彼の創作動機にも深く関連する観点の一つと考える。

王氏は中国の歴史において、春秋戦国時代よりすでに「大漢沙文主義」の観念が重要視されているという。当時の統治側からみれば、「夷狄」に対して、主に漢化させることが主な支配者の方向である。だが現在の思潮に沿うと、19世紀末から20世紀初めいわゆる人類は平等であり、相互尊重が必要だと考えられている。昔の儒教思想にあった「夷狄」意識はもう時代遅れの思考であり、修正する必要があると王氏は語る。そして自分が少数民族に対して興味を持ち始めたのは、高校生時の登山活動がきっかけだったという。そもそも登山が好きで、高校時代から台湾の海拔3000Mほどの山を多数登っている。登山の途中で、多数の原住民部落に入ることができ、彼らと接する機会も多く、登山をよくする彼は山に対する経験も多く、小説のなかにも反映されている。登山活動のなか、ある日彼が能高山に登った時のことである。一人の金髪、青い目の原住民に出会いをもち、当時大変不思議に思ったという。それ以後原住民の血統に関して研究する興味を持ち始めたのである。事実上、スペイン人、オランダ人、黒人が台湾に来た際、原住民と通婚する可能性はかなり高かったのだ。小説に高春風にもホーンと結婚する設定があったが、実際にこのような文献記録もあるし、不思議な構想ではないと考える。

三 作品創作の資料収集過程について

王氏は討論会で資料の収集について、次のように述べた。以下はそれぞれ小説の内容にかかわった資料の収集について説明する。

(1) 歴史資料の考証について

長編歴史小説を書く場合、資料収集は大変重要である。この作品の舞台である大南澳は現在宜蘭県に属するため、王氏は宜蘭県の県志を調べることにしたが、この県志が60年代に書かれたもので、古すぎて疑問点が多かった。またホーンの事件に関する記載が少なく、数句程度の記録しか見られなかった。そこで彼は台湾銀行から出版された台湾史に関する全巻本の叢書(注7)を調べることにした。この叢書に収集された資料は非常に豊富で、中には「同治年間籌辦夷務始末」(清同治年間洋務管理書)があり、ホーンに関する資料が多く収録されていたのだ。ほかに古い地図資料も探したが、宜蘭文化センターから一冊の古い地図が出版されており、その中にはガマランの平埔族文化に対して相当詳密に考証されていた。また器物の資料もあったため、大変役に立ったのである。そのほかに《番族六考》のような資料を多く参考にしたが、泰雅族(タイアル族)、阿美族(アミ族)に関する資料が多く収録されているが、平埔族の資料は比較的少なく、またガマラン族の資料も大変少なかったという。実際平埔族について、苗栗県では道卡斯(トカス)族と呼ばれている。だが苗栗県の住民の9割ほどはこの道卡斯族の存在について知らないという。現在多くの人はこの道卡斯族の末裔だが、原住民に対する差別意識が潜んでいるため、住民自らがトカス族と関係あるのを認めたくないのである。事実上平埔族に関しては、未だに問題が多数残されている。逆にガマラン族の後代の場合、「自我認知」の意識が高く、自らの身分を明らかにすることも多い。平埔族は自我の族群意識が消失してしまったことに、王氏は感嘆するのであるが、当然これらの現象がもたらされた背景には、台湾の過去の歴史的傷跡と深くかかわっているのは言を待つまでもない。

さて長編小説で過去のことをテーマに取り上げる場合、詳細な考証が絶対に必要だと王氏は強調する。人物の名前に関して、例えばガマラン族の姓氏問題(「高」または「潘」の姓がよくみられるなど)、ほかに植物、物産、道路、服装、ガマラン族の人はどのような服装を着用するのか? それを知るために、彼は様々な図鑑写真をかなりの時間を割いて探し求めたという。ガマラン族の衣服、髪型および結婚式の儀式、小説は高春風の結婚式を描写するため、結婚の衣装、儀式の行い方などについてその努力は反映されている。他に気候の問題、台湾の東北に季節風が吹くこと、そして船の構造について。当時の英国、米国の船型? 港口の位置? 谷地、河道の変化、百年以上も前の状況なので、地震と水害によって、かなり大きな変化を伴う可能性は高いので、内容構成と状況描写をする際、このような客観的要素も十分に考慮せねばならないである。

(2) 「械鬥問題」について

続いて王氏は小説にも多く出てくる械鬥の場面に対し、現地移民間の「械鬥問題」について取りあげている。当時は土地と利益の争いを理由に、械鬥はかなり頻繁に起こる重要な社会現象であっ

た。小説の舞台になる時代、台湾にいる漢人たちは広東、福建からの移住者だが、土地と利益のため、械鬥が常に起こっているのである。オランダが台湾を占領したときも中国大陆から多数の華人労働者を連れてきたが、その時でも華人同士の械鬥が絶えなかったという。当時の原住民平埔族は比較的闘争を好まない民族であり、漢人の圧迫をうけ、騙され、台湾中部にいる平埔族は自分の土地にとどまったが、一部分の平埔族は山を越え、宜蘭へ定住するようになり、漢人の圧力から遠く離れたのであると王氏は解説する。小説には械鬥の場面が多数あり、その械鬥がもたらした様々な残痕と後遺症も、いまだに怨念深く台湾社会の底層に残されている。

上述した数点の資料収集に関する重点は、実際にあった歴史事件を創作で取り込む以上欠かせない手続きであろう。そして物語の真実性と感動を読者に伝えるため、作者王氏の真摯な努力が、作品に大きな力と重厚感を与えたと言える。

四 作品の内容に関連する創作経緯について

以下は王氏の作品の創作経緯について、小説の意識構想、物語の進め方、創作の意図的表現、エピソードと物象に関する扱い、人物の描写の趣旨及び歴史文献の取り込み方などについて、作者の発言をもとに説明していく。

(1) 作品の概要作りについて

まず彼自身の創作習慣では、資料収集の完了後、すぐに小説の概要を書き、物語の流れを編集するのである。人物、情節と章、節について、事件の軽重の比例によって、配分する構図を決める。こうすれば、考えに沿って迷わずに書けるといふ。この作品の主軸は実際にあった事件ではあるが、部分的内容は虚構されている。例えば小説のなかでハロルドが神木に対する感動する描写は、王氏自身の登山体験で、神木を見かけた瞬間の自然界の迫力に圧倒され、震撼を覚えた経験を表現したのだという。

創作において、実際の事件であるために、人物も実在があり、その歴史資料は役に立つ反面、人物の構想設定が束縛され、創作の重荷になったのだろうかと討論会で質問されている。王氏は実事件の資料と事件発生の内容に沿って、小説人物たちの行為の合理性を考量しながら、自分の想像力で発揮すれば、却って完全に新しい物語を作り出すより書きやすいと答えている。

(2) 「公文書」の引用について

作品には侵壘事件の処理について、清朝政府とイギリス、ドイツ政府間実際にやり取りをした照会文を直接作品に取り入れたところが数か所みられる(注8)。この点に関して、作品の創作過程で、手抜きにならないかと討論会において質問されている。王氏はその点に関して、次のように答えている。

実際にこの作品が「百萬元小説大賞」に応募して審査を受けた時、ある審査員から現在古文を読む読者は数少ないのに、このまま公文書を使うと作品に弊害がでるだろうとの批判を受けたので

ある。これら照会文は実際当時の政府間がやり取りをした文書である。照会文をそのまま使う前に、原文をもう少しわかりやすい現代文に書き直そうと王氏は考えたが、しかしこれらの文書は確実に歴史文献として存在しているものであり、この作品に対し本当に興味ある読者なら、少し時間をかけても照会文を読んでくれるだろう。書き直してしまえば、真実性がなくなり、本来の面目を喪失し、口調も変わり、当時照会文に含まれた深意が消えてしまう恐れがあり、深慮の結果、やはり書き直さずそのまま使用することに決めている。

(3) 十字架の構想について

作品にはスペイン人伝教師から生番に渡された十字架の描写がある(注9)。そのエピソードについて疑問視されたため、王氏は次のように説明をしている。

事実上、約17世紀頃の明朝時代、ホーンの事件より200年前、スペイン人は既に台湾の伝道活動に来ていたのである。スペイン人とオランダ人は伝道の方法が相違する。オランダ人は來台後のすべてのことに関して記録を残していて、その文献資料は日本人に負けないほど極めて詳細に記録され残されている。しかし伝道活動に関していえば、オランダ人は失敗が多く、平埔族との仲が悪化しただけでなく、泰雅族(タイア族)および漢民族ともうまく付き合えなかったのである。ところがスペイン人伝道師たちは熱情的であり、伝道活動も上手であったのだが、残念にもその関連資料があまり残されてはなかった。当時のスペイン人は生番と熟番とも良好な関係にあったのだ。その後、明朝政府はスペイン人の伝道活動を禁止し、再び台湾に入ることも禁止されたのである。だが文献資料によれば、スペイン人伝道師らが台湾から離れて厦門へ向かう際、タイア族、ガマラン族の人々が大勢海辺に集まって、号泣しながら伝道師たちを見送り、彼らが再び台湾に戻るよう期待したそうであるし、このことは文献で確実に記載されている。十字架に関しては、王氏個人の構想であるとはいえ、スペイン人伝道師の痕跡として、何らかのものが残されても不思議ではなく、十字架は作品のなかにおいて、ある一貫性的意味を表現している。そして実際に物が残される可能性もあると考えている。

(4) 神木の意味づけについて

小説に神木の描写が見られるが、その意味づけについて、王氏は次のように語る。台湾の山には巨木が沢山ある。登山を好む王氏には、その巨木たちに対し、常に震撼を受け、感動させられるという。神木は小説のなかにおいて、暗示の作用を持っているのである。神木は非常に原始的で、美しいもので、数千年も生き残ってきたが、まだまだ生氣蓬勃であり、人間が巨木の前では、微小すぎる存在であろう。当初閩、粵からの移住者たちは、経済的な理由で伐採に熱心であったが、のちに日本人、さらに国民党政府が来てかわることはなかった。人々は深い森林へ入れば伐採を行い、巨木をお金に変えたのである。森林にすむ原住民たちは、伐採を阻止するが、結局殺害されるかまたは追い出されてしまう始末である。原住民がいなくなると、土地のすべてが占領されてしまうのである。

清代の閩、粵からの移民は台湾の資源を略奪するだけであり、数千年も生きてきた巨大な神木は、

個人的貪欲な利益のため、瞬く間に切り倒されてしまったのである。小説のなかに、教士ハロルドはキリストから背離されたが、蠻荒の地の神木群の強い生命力に感動し、神の啓示を再確認でき、再び宗教の情懷へ戻らされたのである。しかしこの真の感動によって、彼の人生が苦難な悲劇の始まりになったのである。ハロルドの角色について、彼のような強い信仰心を持つ人、または理想を堅持する人がこの社会で生きるのは、常に攻撃を受け、または侮辱され、生涯苦勞が絶えない悲劇的結末が多いのである。小説では彼らが背負う苦難な現実の表現を欲したと王氏は強調する。

(5) 陳大化の角色について

王氏は小説最後(第23章 荒蕪の夢)に高春風を救助する陳大化の描写について、それは特別に仕込んだ内容だという。漢人のなかにも良識をもつ人はいるし、現実社会では、群衆らが自分たちの利益のため、多くの人たちを犠牲にさせるのである。陳大化のような類型の人間は多く存在しており、彼らは社会のため多くの問題提起をするが、常に社会の重圧に耐えきれずに潰されてしまうのである。この類型の人は、理想が高いため、現実世界では挫折することが多い。陳大化の最後の部分の作為は、特別に配置したと王氏は言っている。

作者は陳大化の角色の扱いには慎重で、注意したという。最初陳大化は父親に不満を感じ反抗していたのだが、のちにガマランの少女との出会いをもち、彼女を愛して、彼自身の美に対する渴望を引き起こされたのである。番族は醜く怠け者で汚いと顔先生から教わった彼は、自分が普段受けている教育に違和感を覚え始めたのである。後に彼は父親の意にそう青年として行動しなかったため、たびたび父親から叱られ、厳しく管理されるようになって精神的に落ち込んでしまうが、それは彼が自身の良識との戦いのあらわれであったのだ。ホーンたちの開拓をうらやましく思い、ホーンと高春風の結婚式も密かにのぞき見たのだ。番人たちに対し悪く思えないし、自身の心に様々な困惑が拗れて悩まされ続けたのである。結局父親との不和の末、彼は家を離れ、高春風の惨めな姿を道端で見つけ救助したのだ。

陳大化の人生の流れに関しては、作者は特に良識ある漢人たちの心境を考量し、陳大化にその意象を込めて、重層的に描写したのである。

(6) 西洋人に対する描写について

小説で、漢人たちは西洋人よりも原住民に対して軽蔑しているのではないだろうか、小説中の西洋人たちもそれぞれ個人的理由と利益で台湾に来たのであるが、特にホーンとハロルドなど西洋人について、美化しすぎではないかとの質問に対し、王氏は次のように説明を加えている。

漢人が西洋人よりも酷いかについて、見方として西洋人と比較するのではなく、小説と同時代の漢人の実態を見るべきであろう。あの時代において、確かに上述のような現象が起こっている。当時台湾へ赴任した官吏のうち、8割以上が悪吏だったといえよう。実際に歴史資料を調べればその事実はすぐに判明できる。しかしこの宜蘭地区において、かつて三人の良吏がおり、宜蘭地区の開拓に良い方向で貢献したため、彼たちは現在も現地の住民に祭られているのである。丁通判(小説の人物で登場している)および後任数名の官吏は良吏ではなかったそうである。当時漢人が支配側

の立場にいただけに、すべて漢人中心の視点が判断の基準である。現在多くの文献では、このような視点と書き方で歴史事件が記載されているのである。例えば記録に原住民の乱が鎮圧され、官軍が全勝したといえ、事実上、原住民が多数殺害され、または駆逐されたということである。平埔族は台湾の土地の五、六千年に及ぶ住人であったが、このような大虐殺の被害はかつてなかったのである。現在の歴史資料に、漢人たちが箒路藍縷で開拓を行ったことがよく記載されているのだが、これも支配側の視点である。

ホーンを特に美化したわけではない。ホーンは感情豊かな人間であり、美に対して強烈に感動するだろうと考え、原住民との触れ合い方もこの視点をもとに、ホーンという人物の自然体を描写したと王氏は述べている。

五 作品の出版に関して

この作品は断続的に1年2か月をかけて書き上げられたが、初稿、書き写し、書き直し、完成するまで、50万字から12万字に絞られたのである。本来この小説は《自立晩報》「百万元作品大賞」のコンクールに応募するための作品だったが、落選した後、《自立晩報》からこの作品を摘要連載する話が持ちかけられ、結局《自立晩報》で連載し始めたのである。

《自立晩報》の連載終了後、王氏はこの作品を数軒の出版社へ送り出版の意を伝えたが、落選作品であったため相手にされず、最終的に九歌出版社から出版できたのである。当時は出版できるだけでも幸いだと王氏は考えたのであるが、自序文または他人に序文を頼んで付けると、ページ数も増し原価も増加するのである。それで出版社に作品の序文を付ける要望さえださずに、連載原稿のままで出版されたのである。結局序文なしで出版されたことは作者王氏にとって、長年の心残りであったため、今回日本語訳本の出版には、この作品の創作目的と時代的重要な位置づけ、さらに作品初版後、台湾社会情勢の変化に対する様々な思いを含め、改めて自らの創作に対する深い意識を込めて、長い「自序文」として書いている。

おわりに

これまで作品について、作者の創作における様々な思いを作者自身の語りより記述してきた。その創作における時代背景を考量すれば、出版当時においてこの小説が社会に対しかなり衝撃的であったのは多言の必要はない。そしていま台湾社会は如何であろうか。あらゆる面において、既に多元化され、反省できる社会風潮も育まれてきたといえよう、しかし現実をよく検視すれば、当時この作品によって提起された社会問題は、まだ根深く人々の心の深層に潜み、完全に消え去っていないのが事実とみえる。特に政治問題にかかわれば、個人または集団の利益のため、政治競争、対抗の材料に利用され、奇妙にこのような根深い怨念の意識が露呈されるのである。どこかで挑発され、庶民感情を揺るがせ、社会思潮を振り回しながら、混乱と不条理をもたらすのである。これは一般の移民社会によく見られる現象であり、数百年にわたって培われた不合理的な現象である。台湾歴史

をもっと透明に伝承していくためには、この小説が主張した理念がより重視され、真剣に受け止める良識が必要である。そしてそれが全ての住民意識の間に定着され、展開されなければならないと考える。

注釈

- 注1 論文「台湾現代文学者王幼華の作家人生と創作観について」は2012年8月刊行の《筑紫女学園大学紀要》に発表している。
- 注2 討論会内容は《当代文学評論集》（王幼華著 苗栗縣立文化中心出版）13章「原住民の悲歌」として収録されている。
- 注3 このインタビュー実録は2007年9月30日巫雅琪氏から王氏宅にて行ったのである。原稿記録は2008年修正され、王幼華資料彙編に収録されている。
- 注4 《浪淘沙》は1997年出版された作家東方白（本名林文徳1938～）が10年の歳月を掛けて書き上げた150万字の大河小説である。作品は台湾の歴史をもとに、1895年日本の植民地にされてから当代まで、三つの台湾家族3代の波乱万丈な生涯を描写している。小説の空間、舞台は台湾本土、中国大陸、日本、東南アジア、アメリカ、カナダなどに及び、外部の勢力（浪）が、絶えずに台湾人民（沙）を（洗淨している）洗いだす（淘）を比喻して歴史的現実が描かれている。
- 注5 この論文は王氏の博士論文の一部である。原文は2005年4月1日に日本発行の《社会文学》第21号に中国語で発表されている。本論の後に、筆者は『「作家」兼「研究者」である王幼華と語る』の解説文を書いている。作者についての紹介のほか、インタビューで本人と論文の主旨などについて語ったのである。
- 注6 作品が日本語翻訳出版のために、作者は初めて序文「吾島・吾土・吾民—《土地と靈魂》日本出版のため」を書き、台湾の文訊雑誌（2012年2月号）に発表している。
- 注7 この資料は台湾銀行経済研究室編印の《台湾文献叢刊》である。
- 注8 小説の第17章、20章、21章、22章、24章に公文書の照会文がある。
- 注9 小説の第16章「金の十字架」を参照。

（セキ キリン：アジア文化学科 教授）

（本論は2011年度 筑紫女学園大学個人研究補助金による研究成果である）